

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2020年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	現代心理学部・准教授	大山 載吉 印
研究課題	ジル・ドゥルーズ『シネマ』はいかなる意味で哲学の書であるか。	
研究期間	2020年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 489,929円 / (採択金額) 490,000円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと。)

本研究は、哲学者ジル・ドゥルーズの『シネマ1*運動イメージ』と『シネマ2*時間イメージ』という著作が明確に哲学の書であることを論証するものである。多くの映画研究者、映画愛好者がこの著作に魅了され思索を深める一方、哲学研究の側では、この著作はあくまでも哲学者の「余技」として受け止められる傾向があるなか、それがいかなる意味で哲学=形而上学の書物であるかということが明確にされたことは殆ど皆無である。本研究は、映像の本性と身体の本性を一貫して貫く「自然=存在」を問う「映像身体学」と「形而上学としての哲学」の観点からそれを解明するものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ジル・ドゥルーズ] [『シネマ』] [映像身体学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1

「映像身体学」の観点から、ドゥルーズが見出すアンリ・ベルクソンの哲学における知覚のメカニズムを明らかにした。すなわち、あらゆるものが光の渦動として絶えず流動し、様々なリズムと次元で離散と結合を繰り返しながら、自らがあるものの部分要素となったり、あるいは、他の要素を内包しひとつのあるものへと構成されたりしながら常に変化の途上にあるなか、「何か(=対象)」が「主体」に立ち現れてくる知覚のメカニズムである。さらに、ドゥルーズがこのベルクソンの知覚理論を踏まえ、生物とは異なる機制をもつ機械による知覚についても明らかにした。具体的には、写真や映画のカメラは主体性=知覚の中枢性を備えない機械であり、それが映すものは原理的に私たち生物の知覚とは全く異なる(生物は自己保存を維持するために必要なものを知覚する身体を有しているが、カメラはそうではない)。それゆえ、原理的にカメラは行動の利得を離れて世界を映し出すことができるのであり、「誰のものでもない知覚」、主体に制限されない世界それ自体、ベルクソンが構想した即自的イメージを映し出すことができることを明らかにした。この機械による知覚こそ、『シネマ』の要諦であり、『シネマ』においてそれがいかに論じられているかを詳細に解明した。

2

哲学=形而上学は、物質=質料の領域(形而下学の領域)を超えて非質料の領域を扱う。具体的には、魂や精神、想念や感情、理念や記憶といった、空間に延長していないが確かに存在するものについて思考する。知覚が物質的な外的世界との関係において生じるとするならば、非質料的なものはまずもって「意識」と言われるものにおいて生じるもの全般を指す。これら質料の系と非質料の系は絶えず変容しながら絡み合った混合状態を形成している(これが生命体の在り方である)のだが、これを踏まえれば、原理上「誰のものでもない知覚」が実在するのと同様(カメラはそれを映し出すことができる)、「誰のものでもない意識や記憶」といったものもまた確かに実在すると言える。この「主体」の経験を超えた「誰のものでもない」超越論的な領野、すなわち、非人称の即自的存在に私たちの思考はいかにして達することができるか。これが哲学=形而上学の問題であるのだが、『シネマ』ではそうした即自的存在というヴィジョンに達した映画監督として、ジガ・ヴェルトフが挙げられていることに着目し、ヴェルトフがどのような着想と技法によって自らに固有のイメージを作り出しているか、また、そうしたヴェルトフのイメージを出発点として他の映画監督が、様々なモンタージュを用いてこの質料と非質料の領域をどのような配分で描き出しているか(とりわけ、純粋に非質料的なイメージをドゥルーズは「時間イメージ」と呼んでいるが)を明らかにした。

3

『シネマ』では、非質料的な思考の極地の一形式として、「可能世界」が取り上げられる。「可能世界」とは「こうでありえたかもしれない世界」、「今とは違っていたかもしれない世界」のことであり、誰もが日常的に思い描く想像の産物=虚構であると考えられている。そのような「可能世界」を用いた映画作品として、『シネマ』ではとりわけ『去年マリエンバードで』と『二十四時間の情事』が扱われる。ここでの論点は、「共立不可能なはずの可能世界群は現実において共立できるのか。共立できるとするならばそんな可能世界はどこに実在しているのか。あるいは、やはり可能世界は想像力を喚起するファンタジーでしかないのか」という問題であるが、ドゥルーズはこれに対して、ライプニッツにおける微分方程式における「発散」とニーチェにおける「永遠回帰」を援用しながら「いま・ここ」の現実には絶えず実在する「別の世界」たちが実際に重なり合っており、むしろ、重なり合っていないとするならば、「いま・ここ」は実在性を有さない架空のものとなることを示す。その一方で、こうした主張は哲学の「強弁」などではなく、「想像の産物であるかに見えながらも、確かに実在する世界」が量子論の多世界解釈において指摘される事態と響き合うことを解明した。また、エルヴィン・シュレディンガーの生命論を参照しながら、波動関数の値が確定される以前の波としての粒子は紛

研究成果の概要 (つづき)

れもなく物質でありながら、空間内に局所づけられないという非質料的な性質を有すること、すなわち、この非質料性こそ物質に内在する精神性であることを明らかにし(それゆえにこそ粒子は波の状態において空間内に位置を確定させることができない)、ドゥルーズが世界、あるいは宇宙が物質=精神という二重性を帯びた一つの生命=存在であり、共立不可能なはずの可能世界の共立(例えば、「アダムが林檎を食べる世界」と「アダムが林檎を食べない世界」の共立)が実際に成立するのは単なる想像力の産物ではなく、多世界の共存を可能にすると主張する根拠を浮き彫りにすることができた。

※この(様式 2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 大山載吉、「映画哲学序論——いかなる意味でジル・ドゥルーズ『シネマ』は哲学の書物であるのか」、『立教映像身体学研究』、第8号、2021年3月発行予定 (印刷中)